

肉用鶏に発生した慢性うっ血脾の12例

茂木洋子 阿部増美 佐藤良市 渡辺一雅

菅原博文 森田 靖 清宮幸男[†]

(一社)岩手県獣医師会食鳥検査センター (〒020-0851 盛岡市向中野5-28-27)

(2025年5月22日受付・2025年8月18日受理・2025年10月11日公開)



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/78/10/78_e137/_article/-char/ja

要 約

食鳥検査時に慢性うっ血脾と診断された45～52日齢の肉用鶏12例の脾臓を病理学的に検索した。全例の脾臓が重量で23～114 gに腫大し、褪色及び硬化を伴っていた。膨隆した割面上、被膜が肥厚し、暗赤色の脾髄に淡黄色組織が樹枝状または塊状に増生していた。病理組織学的に、脾臓の被膜及び脾柱が線維芽細胞及び膠原線維の増生により肥厚し、白脾髄を構成するリンパ球が減数し、赤脾髄が赤血球を満たして拡張していた。3例の赤脾髄に褐色顆粒を貪食したマクロファージが増数していた。3例の脾静脈の脾臓内分枝に器質化血栓及び2例の同分枝に慢性炎症または亜急性炎症がそれぞれ観察された。得られた成績から、観察された静脈病変が鶏の慢性うっ血脾の一要因として関与していたことが示唆された。——キーワード：肉用鶏，慢性うっ血脾，器質化血栓。

-----日獣会誌 78, e137～e142 (2025)